

染香

ぜんこう

福泉寺寺報
令和4年6月
第 108 号
毎月 1 日発行

ホームページ

一夜漬け
うまいくのは
野菜だけ

なりたい自分

東京は新宿区にある「牛込第二中学校」の校長先生が、「なりたい自分」と冠して、素晴らしい文章をホームページに掲載されていたので、直接お電話を差し上げて、ここでの転載のお許しを頂戴いたしましたので、皆さまにもご紹介します。

《みなさん、おはようございます。14日は朝礼がありますので、なりたい自分についてお話をします。以下に全文を掲載します。

「生徒のみなさん、おはようございます。年末から年明けにかけて、3年生一人一人と面接をしました。そのとき、必ず聞いたのが、「夢や目標はありますか?」というものです。3年生はそれぞれに自分自身の夢や目標を語ってくれました。

正直に言えば、中学生の段階で将来の職業まで考えることは難しいです。もちろん具体的に職業まで答えてくれた3年生もいましたが、その数は多くはありません。

無理に職業まで思い描かなくてもいいです。まずは、なりたい自分を想像してみてください。人のためにコツコツ働く自分、意見を通して社会を動かす自分、何かを生み出したり創り

出したりする自分、今の自分がなりたい自分はどんな自分でしょうか。

夢や目標や方向性はそういつたところから始まります。まずはなりたい自分を思い描く。そして、今できる一歩を踏み出す。その積み重ねが未来のあなたをつくります。

近いうちに、みなさんにも同じ質問をしたいと思います。ぜひ時間をとって考えてみてください。思いつかなかったら、一緒に考えましょう。》

これからの若い命に、どのように響いているでしょうか。想像が膨らみます。

さて、このことは若い人に限りません。ご年配の方々も、「生きているうちに、これだけはしておきたい」というものを誰もが抱くでしょう。

それとは別に、「どんな自分でありたいか」。これこそ、私たちの有限なる人生にとって、意義ある問いではないか、そんな風に感じます。そして、こちらの方が、じつは大切なのではないかと思うのです。

この校長先生の文章に出会ってからは、わが子には「何をしたいかの前に、どんな自分になりたいか」と話しかけています。4歳の末娘は「プリキュア」と言っています。(笑)
皆さんは、いかがでしょうか。(住職)

【できる! 自宅葬・寺葬】

「不自由さ、不便さの中に伝えたいものがあるんじゃないですか?」

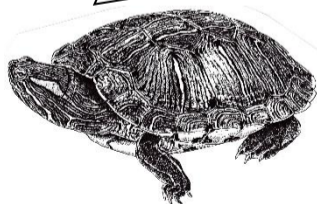
あるご門徒さんに言われてハッとしました。寺で出来る葬儀を考える時に、私は「安さ」「手軽さ」「便利さ」を追求していました。

私が皆さまに提供したいのは「人の思い」です。誰かの思いを受け取る、自分の心に気づく装置としての葬儀です。ここに「合理的な考え」は無用かもしれません。時代に逆行しているような考えかも知れませんが、ご門徒さんのこの言葉は、気に入っています。人の心も味噌や醤油と同じく「醸成」に手間と時間がかかるものです。

ちょっと あたまの こりほぐし

「め」「はな」「は」はあるけれど
「みみ」や「くち」はありません。
これは何でしょう?

こたえは裏面でーす



今年の報恩講は、盛り上げます!

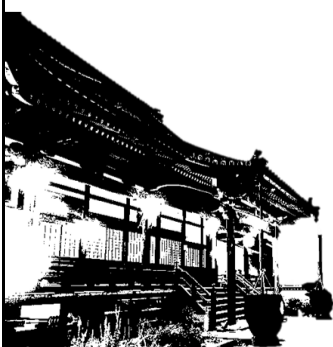
じつは今年「本堂建立百周年」にあたる年です。大正十一年に建立されました。また、来年は「親鸞聖人御誕生八百五十年」(りつきょうたいしゅうひゃくごじゅうごねん)「立教開宗(りきょうかいしゅう)「浄土真宗」という宗教が立ち上がった)「八百年」にあたります。

これらを記念して、「報恩講」を三日間の行事にしようと考えています。

たとえば、事前に子どもたちと「写生大会」を開催して、本堂や仏さまの絵を飾るとか、くじ引きをするとか、あと、好評だった「リレー法話」です!とにかく楽しく過ごせたらと思います。

もちろん、国の情勢を見つつ、無茶をせず。手間暇かけて「思い出」を共有できなかったと思っっています。

お楽しみに!



「盤上の物語は不変」

その言葉は藤井聡太が初タイトルである棋聖を獲得した直後の記者会見で発せられた。令和2年7月16日、大阪市福島区の関西将棋会館。「将棋はAI（人工知能）との共存期を迎えている、棋士の可能性は」との問いに対してだった。

「将棋界の盤上の物語の価値は不変だし、自分としてもそういう価値を伝えていけたらと思う」

17歳11カ月、第91期ヒューリック杯棋聖戦五番勝負を制した史上最年少のタイトルホルダーはしばらく考えた後、そう語った。初タイトルに沸く周囲の熱気とは対照的な、静かな口調だった。

大津市の写真家、別所隆弘（45）は、この言葉に強い衝撃を受けた。

「自分のやってきたことはよかったんだ、と確信を持つことができた」

大学院で英米文学を修めたが、研究者としての限界を感じ、ふとした契機で写真家になった。研究から「逃げた」との自責の念がある。「まったく違う道に進んだんですね」と言われる。でも最近、「文学も写真も、すべての人間の表現活動は同じだ」と考えるようになっていた。

「今朝も3時に起きて撮影してきたのだが、風向きや太陽を調べて現地に行くと、そこで偶然、友人に会った。撮影に至るまでの葛藤から現地での友人との会話まで、発表される1枚には表には出ない背景が

込められている。文学もそう。すべての表現は『物語』ではないか」

現在、AIがあらゆる分野を侵食している。人間がやる意味は何か。別所は、それが「物語」だと結論付けた。さまざまなコト、モノが絡み合って、一回しか起こらない勝負の綾。別所は「人間がすべてをかけて結果を生み出していく過程」に、人は心を動かされる。情報ではなく、リアリティーに」とみる。

その「物語」の価値はこれからも変わらない、と17歳がさらりと言った。SNS（ソーシャル・ネットワーク・サービス）には感動の声があふれた。

別所は言う。「今の時代を生きる多くの人が、彼の言葉に背中を押されたのでしよう。自分を肯定していいんだ、と」

胸打つ敗者への敬意

「AIの申し子」「AI超え」。藤井が称されてきた形容詞だ。

藤井の世代は子供のころからパソコンやスマートフォンが当たり前という「デジタル・ネイティブ」である。AIで将棋を研究し、初タイトルを取った棋聖戦五番勝負第2局ではAIを超える手、つまりAIに6億手読ませない最善手と判断しない手を指し、世間をどよめかせた。

「その藤井さん自身が『物語』と言ったことが衝撃だった。『盤上に物語はない』と言っても不思議ではないのに」

藤井が注目されてきたころから関心を持ち、ほぼすべての対局中継を見てきた作家、藤原智美（66）は話す。

藤原は、この言葉が感動を呼んだ理由の一つを、敗れた相手への敬意がある点だとみている。

物語は勝った人だけではつれない。負けた相手もそれまでのできごと、いろいろな人やコトが絡み合っ紡がれていくものだ。そして敗者が強ければ強いほど、物語の感動は強まる。

「今は勝つことに最大の価値が置かれる。そんな時代に、勝ち負けの手前にある、人と人がつくる物語にこそ価値があると語ってくれた」

将棋や囲碁は、勝負ことなのに勝っても喜びを表さない。投了になれば、互いに盤をはさんで礼をするだけだ。剣道や柔道など武道にも、その傾向がある。

昨夏の甲子園決勝。智弁和歌山は優勝を決めた後、マウンドに集まったの歓喜の輪をつくらず、すぐにホームに整列した。主将は試合後、理由を「相手もいますし、礼が終わってから喜ぼうと思った」と語った。最終的に選

手らが決めたという敗者への敬意が、人々の胸を打った。勝負ごとでなくとも、誰もが取り返しのつかないミス

をしたり、何らかの事情で働けなくなったりする。誰でも勝者になり、敗者にもなる。一緒に物語を紡ぐという思いがあれば、誰かを負け組と切り捨てることはできるはずはない。

あいまいさ受け入れ

物語を軽視し、勝ち負けを重視する。これが今の時代だとしたら、藤井の言葉が響いたのは、多くの人がうすうす「本当は違う」と感じているからだ。

勝ち負けだけを重視する社会は「ゼロかイチか」のデジタル社会といえる。あいまいさがなく割り切ることができ、予測可能だ。

藤原は「企画書はA4、1枚に大きな字で書くのがよしとされ、ツイッターは140字で伝えなければならぬ。分かりやすく、すぐに納得できるものでなければダメとされる時代だ」と説明する。

精神分析で知られるオーストリアの精神科医、フロイト（1856～1939年）は「大人になるといふことは、あいまいさを受け入れる能力を持つということ」という言葉を残したという。

リアルな社会はあいまいで割り切れず、予測できない。ここ2、3年でも、新型コロナウイルスが世界中に蔓延したり、ロシアがウクライナに侵攻したりするなど、誰が予測できただろうか。

藤原は「人間社会は複雑なもの。今は複雑なものを単純化することがもてはやされる。複雑なままで考え抜かないと本質は見えてこないし、予測不可能なことに対応できない」と語る。

あいまいなまま、考え続けるには胆力たんりよくが必要だ。ぶれない支柱とでもいおうか。合理的な処理能力の高さは短期的な称賛は得られても、その向こうに豊かな未来は見えてこない。

敬称略（小川記代子）
（産経新聞5月30日「藤井聡太の言葉」）

